

西丸 震哉著『机上登山』

歳をとってくると、山に行くのが億劫になり、蒲団に潜ってあれこれの夢想に耽ったり、部屋に広げた地図の上を虻になって飛び回ったりして、夢幻の世界に沈殿することが多くなる。

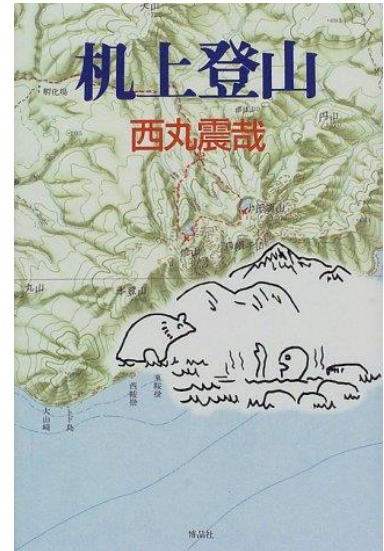
私は地図を眺めるのが好きで、また、私ほどのベテラン(?)になると、地理院の2万5千図幅を目を半眼にして眺めるだけで、山容、地形は言うに及ばず、生えている植生、棲んでいる生き物の様子から、新緑の木漏れ日、錦秋の紅葉、はてはゴーゴーと吹きすさぶ風雪の音までが聴こえてくるから不思議なものである。

別稿「夢幻の山旅」のページでもこの手の大法螺を吹きまくったが、ここで紹介するこの本は拙稿と比べて格段に精度が高い(と思わせるようにゴマカしてあるのかもしれないが・・・)。

北は北方四島の択捉島から、南はマングローブの西表島まで、殆ど人が行かない20箇所の“別天地”を2万5千図幅に記載された地図記号だけを頼りに、著者独特の地図と博物学に対する蘊蓄を傾けつつ、桃源郷と思われる場所を探し出して机上逍遥した架空紀行である。織り込まれた世相アイロニーや何ともユーモラスな挿画も楽しい。

ここに取り上げられている“別天地”20箇所の殆どは、人跡未踏の全くの秘境という訳ではなく、一般の登山道から長くても半日ぐらいヤブ漕ぎをすれば到達できる場所であるから、一つや二つは、著者の大法螺加減を検証するためにも歩いてみられたら如何であろうか。私もそのうちの1箇所に当たりをつけているが、それは実際に踏査してからのお楽しみにしよう。

マ、大驚になった積もりで地図を鳥瞰しながら、自分でそのような場所を探し出し、ヤブを漕ぎ漕ぎ実際に訪れてみて、如何に己の読図力がエエコロ加減なものであったかを思い知らされることも悪くないのではなかろうか。博品社 1998 年刊



(2005 年 1 2 月 記)

[「山書の小溪」目次に戻る](#)